

福島の声届け、福島の時代を共に生きる3.11以降の在り方を探り支援と共生を目指す新雑誌。

J-one

ジーワン
[生命あるもの]

www.j-one21.jp

2013.5
500yen

福島
と生きよう。
ライフワーク企画

02.19 $\mu\text{Sv/h}$

ふくしま子ども保養作戦
原発事故 子ども・被災者
支援法の使い方
「今伝えたいこと(仮)」
相馬高校放送局の飛翔

J-one トーク「3・11 福島を伝える」
未来への医師——地域医療と甲状腺モニタリング

40周年——今だから広めよう！「はだしのゲン」
ルワンダから福島へカンベンガ・マリールイズ



Natacha Nisic Natalie Durand

ナターシャ・ニジック(左)とナタリー・ドゥランド(右)

DE FRANCE
photos and text by Sugeeta Kajuto
Filming
撮る鳥
dans Fukushima

東日本大震災から2年を迎えた3月、フランスのジュ・ド・ポーム国立美術館での上映作品制作のため、福島を訪れた女性アーティスト、ナターシャ・ニジックとナタリー・ドゥランドをJ-oneがサポート。原子力大国へのメッセージは如何に届くか？

3月6日朝、成田空港に到着し、その足で都内の撮影機材会社に寄ったナターシャと撮影を担当する女性シネマトグラファーのナタリーを乗せた撮影隊と午後から合流し、いわき市へと向かった。今回、私が提案した撮影場所は、いわき市久之浜(J-one 3号)、飯館村、南相馬市小高区、相馬市原釜漁港(2号)、福島市内にある公園の5箇所。まずは被災地を見たいとの事で小名浜付近へ出るが、すでに夕暮れ。震災から2年経ち、瓦礫などは当然片付けてある。イメージとの隔たりを感じたのか、彼女たちは突然「石巻へ行きたい」と言い出す。久之浜には、津波が避けるかのように残ったお宮があり、ぜひ彼女たちに撮って欲しかった。

そこで翌朝、「石巻へ行く前にちょっと寄ろう」と持ちかけて、久之浜へと向かう。それもなるべくインパクトを高めるため、国道6号を使わず内陸の常磐道を走り、山間から忍び寄るようにダイレクトで久之浜へ出たのだった。案の定、津波と火災に家屋を失い住宅の基礎だけが残った久之浜の風景は彼女たちの心に響いた。もう石巻へ行く事などは忘れ、ふたりは久之浜周辺をたっぷりと歩いてまわり、終にはフランスから持ち込んだ特殊なミラーの代わりに閉店した商店の鮮魚陳列棚用の長鏡までしっかり目をつけていた。3号に登場して頂いた熊野丸の新妻竹彦さんが区長の吉岡栄一さんを紹介してくださり、急なお願いにも関わらず9日と10日花供養での撮影を快諾してもらった。

さて、南相馬市へ行くにも警戒区域内が跨がってそのまま北上出来ず、3時間以上かけて内陸の中通り経由で廻らなければならない。広野で検問と除染作業を撮影した事もあり、南相馬へ辿り着いたとしても夕暮れだ。そこで、飯館村から福島市内に移転した珈琲店「極久里」の市澤美由紀さん(3号掲載)からこれまた快諾を得て「極久里」本店と畑での立ち入り撮影を行う。私の線量計で3.11μSv/hを計測したが母屋の裏側などは段違いに高いらしい。飯館村は夜間の宿泊が認められない計画的避難区域だが、福島～南相馬の幹線となっているため交通量はかなり多い、という矛盾。

翌7日、再び飯館村を訪れ役場周辺で撮影、午後には南相馬市小高区へ。駅前の空間線量は0.30μSv/h。警戒区域解除から1年経ち、道路にまで崩れ落ちていた家屋は撤去されているものの、ゴーストタウンの印象は拭えない。海沿いは津波の跡地は塩害で草木も生えず、日本とは思えない荒涼とした風景が広がる。

石川県能美市・誓立寺での「東日本大震災追悼の集い」等かねてより予定の入っていた2日間、私だけ中抜けして福島～東京～石川～福島と強行移動し、10日の深夜に戻る。この間、ハブニングが続いていた。小高の海沿いで撮影中、強風のため、なんとレンタカーのドアが破損。また、7～8日の撮影で5μSvは被曝した事を受け、途中から参加した特機スタッフの社長が20歳の社員を久之浜の撮影だけで帰っていた。今回の撮影では警戒区域内には入らない約束だったが、警戒区域外で自由に立ち入れる場所でも一日屋外で撮影をしていれば、震災以前の80日分以上の被曝量となる場合もあるのだ(1日当が80倍ならまだしも)。

3月11日、震災から2周年。福島市内の公園(表紙・2頁参照)で早朝から撮影。半年以上も前から立入禁止となっている公園だ。移動車を載せるレールを敷き、例の長鏡をセッティングして横移動撮影すると、雪に埋もれた公園の風景に反対面に行く通勤・通学者の姿が切り取られて映り込む効果を狙っているのだった。

その後の相馬市原釜漁港には、折しも震災2周年とあって日本テレビの中継車も来ていた。港でレールをフルに敷いて撮影した午後2時過ぎ、松川浦に面した尾浜へと移り、2時46分、皆で黙祷を捧げる。穏やかな水面であった。もっとも、夕方、NPO事務所にて松川浦を襲った津波映像を見せてもらったナターシャたちは自分たちが先程撮影していた場所があっという間に津波に呑まれ、松川大橋の橋桁が沈まばかりになっている映像に青ざめていた。

最終日12日。彼女たちの望んだ最後の撮影場所は、「仮設住宅」。それも人々が生活しているところをレールと鏡を用いて撮影したい、と言う。無理難題に思えたが、これも日頃から仮設住宅全戸訪問で避難者ケアに尽力している横山恵久子さん(2号掲載)の紹介で大野台第一仮設住宅の方々からこれまた快諾を得て実現。屈託のないおばちゃんたちの談笑風景を撮る事が出来た。今回の撮影では実質切り盛りした赤津浩子さんの力が大きい。両親が福島出身で、特に母方の親戚は浪江町という事もあり、これで震災に向き合えたと言う。

原発作業員の宿にも泊まり、ナターシャたちはフランスへと帰った。別れ際、日本のお土産代わりに「福島バッジ・プロジェクト」のバッジを差し出すと、ナターシャは「NO NUKE」を、ナタリーは「YES NUKE」を逆さまに付けた。日本での上映が待ち遠しい。



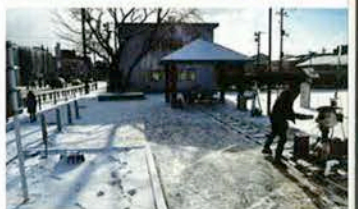
撮影中のナタリーとナターシャ。相馬市原釜漁港にて。



3月10日に開催されたいわき市久之浜花供養の風景。



スタック中も悠然とカメラアングルを決めるナタリー。



早朝から雪化粧した福島市内でレール撮影。



明るいおばちゃん達と相馬市大野台第一仮設住宅で。

